

—原著論文—

助産士導入に関する看護師・助産婦間の意見の相違

石田 貞代 ・ 望月 好子 (小田原高等看護専門学校)

要旨：本研究の目的は、14項目の助産士賛否尺度を用いて、助産士導入に関する看護師・助産婦間の意見の相違を項目ごとに明らかにすることである。またそれぞれの意見の相違に関連している事柄を明らかにすることである。母性実習の経験のある看護師 156名、病院に勤務する助産婦 158名、計 314名から回答が得られ、次のことが明らかになった。

1. 10項目で看護師・助産婦間に有意の差がみられ、全体として、看護師は助産婦に比べて助産士導入に有意に賛成であった。
2. 看護師では、女性患者への身体援助を行っているものや、助産への興味や助産士への希望があるもの、免許取得年数の多いもの、子どもをもつものが、そうでないものに比べて、助産士導入に有意に賛成であった。
3. 助産婦では、夫立ち会いを推奨しているものが、そうでないものに比べて、助産士導入に有意に賛成であった。

助産における性差をどう捉えるかについて、さらに分析が必要である。

キーワード：助産士、助産士賛否尺度、看護師、助産婦

はじめに

1994年に保健士資格が導入されて以来、看護職で男性の資格取得が認められないのは助産職だけとなった。いわゆる「助産士」導入に関しては賛否両論あり、結論をみていない。

1988年以来「助産士」導入に関連した調査は数多く行われているが、いわば将来の助産士予備軍である看護師と現在の助産の担い手である助産婦の両方を対象に、助産士導入への賛否とその具体的な理由を回答してもらい、比較分析した質問紙調査は行われていなかった。また、賛否意見に関連する事項について検討した調査もなかった^{1)~3)}。

そこで、両者を比較する場合、勤務施設と年齢および経験の影響を小さくして、助産士賛否の問題の本質をより現実的に検討する必要があると考えた。具体的には、90年以後男子学生に母性看護学実習が義務づけられた経緯から、その経験のある看護師と、出産の多くを扱い、男子を含めた看護学生の実習を多く受け入れている病院に勤務する助産婦を、調査対象に選んだ。

本研究の目的は助産士賛否尺度を用いて、助産士導入に関連した看護師・助産婦間の意見の相違を、勤務施設と年齢および経験の影響を小さくして、項目ごとに明らかにすることである。また、両者の賛否意見に関連する事項を明らかにすることである。

本研究において「助産士」とは、現行の助産婦資格を将来男性が取得した場合の資格および職業の総称をいう。

．方 法

1. 質問紙で用いた助産士賛否尺度

助産士賛否尺度とは、対象者に助産士導入の法改正について賛成、反対の意思とその理由を問う5段階スケールの14項目尺度である。955名を対象に信頼性を測定したところ 係数は0.93であり、信頼性は高かった⁴⁾。

本研究では各尺度の5段階の回答を、「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の3段階に集計し直し、項目ごとに、看護師・助産婦間にどのような意見の相違が見られるかを明らかにするために、² 検定を行った。

2. その他の質問項目

看護師に対しては日常の援助、助産への興味や助産士への希望などを、助産婦に対しては夫立ち会い出産の推奨の有無についてたずね、各事柄と助産士賛否との関連をみるために² 検定を行った。

3. 対象、期間および調査方法

全国の施設に勤務する、母性看護学実習の経験のある看護師と、関東近郊の病院に勤務する助産婦を対象に1994年9月から10月に調査を行った。郵送法により看護師156名、助産婦158名から有効回答を得た。

4. 対象者の属性

1) 対象者の年齢

看護師の平均年齢は30.7才（最小値21、最大値49、標準偏差7.1）、助産婦の平均年齢は30.4才（最小値22、最大値50、標準偏差6.9）で両群の年齢の分散に有意な差はなかった。

2) 子どもの有無

看護師は助産婦に比べて子どもがいるものが有意に多かった。

3) 免許取得後年数

免許取得後の年数に有意な差はなかった。これらの結果を図1に示した。

．結 果

1. 助産士賛否尺度における看護師・助産婦間の相違

14項目の分析結果を図2に示す。

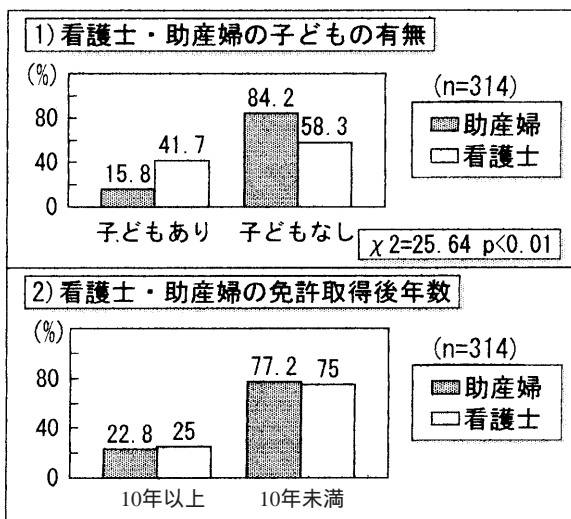


図1 看護師・助産婦の属性の相違

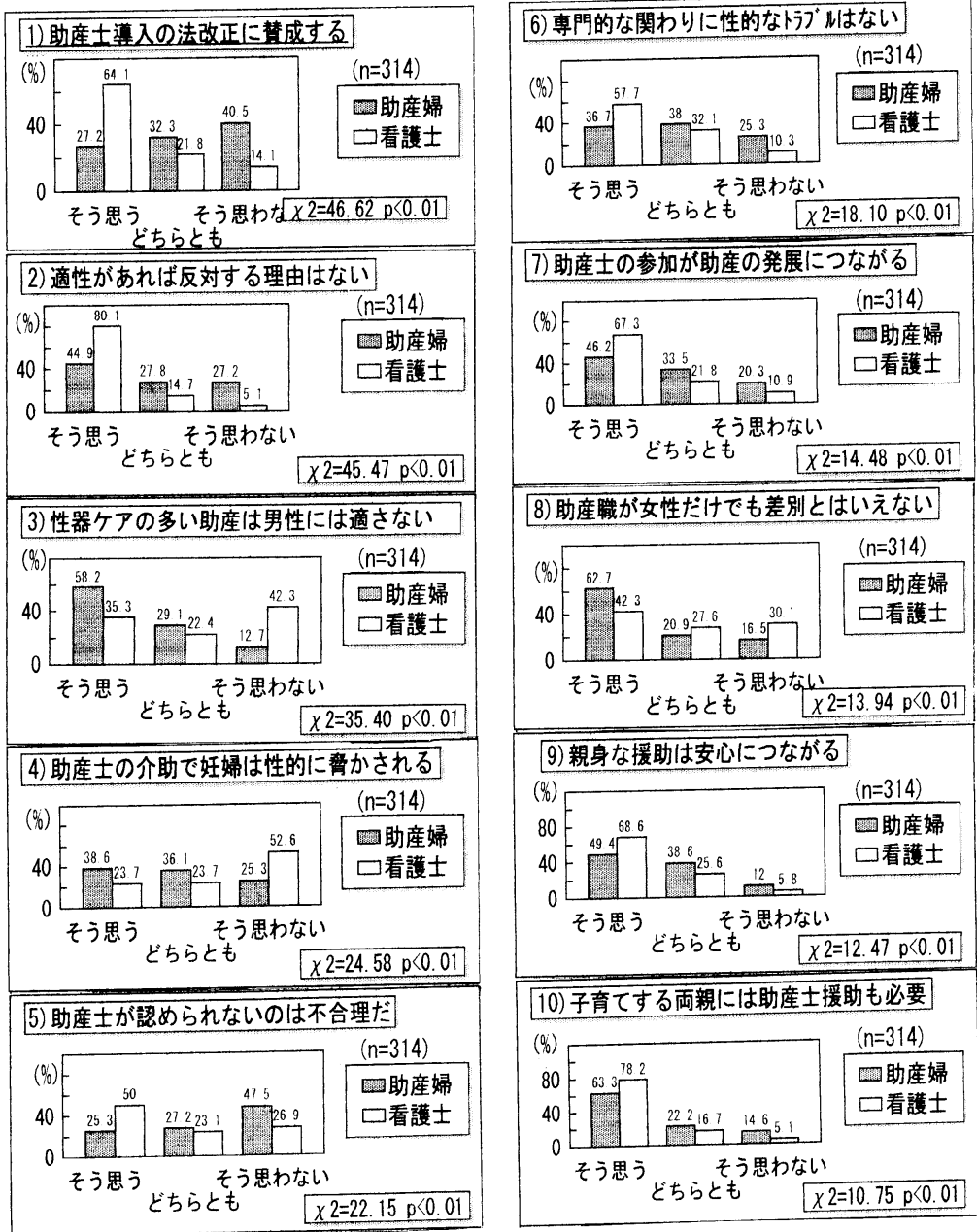


図2 助産士賛否尺度における看護師・助産婦間の相違

14 項目のうち、看護師・助産婦間で有意な差が見られたのは次の 10 項目であった。

1) の「助産士導入の法改正に賛成する」について、「そう思う」のは看護師 100人 (64.9%)、助産婦 43人 (27.2%)、「そう思わない」のは看護師 22人 (14.1%)、助産婦 64人 (40.5%) で、看護師は助産婦に比べて「そう思う」が有意に多かった。($\chi^2 = 46.62, p < 0.01$)

(以後、最も差が大きい意見の人数と割合のみを表記する)

2) の「適性があれば反対する理由はない」について「そう思う」のは、看護師125人(80.1%)、助産婦 71人 (44.9%) で、看護師は有意に「そう思う」が多かった。($\chi^2 = 45.47, p < 0.01$)

3) の「性器ケアの多い助産は男性には適さない」に、「そう思わない」看護師 66人 (42.2%)、助産婦 20人 (12.7%) で、看護師は助産婦に比べて「そう思わない」ものが有意に多かった。($\chi^2 = 35.40, p < 0.01$)

4) の「助産士の介助で妊婦は性的に脅かされる」について、「そう思わない」のは看護師82人 (52.6%)、助産婦 40人 (25.3%) で、看護師は「そう思わない」が有意に多かった。($\chi^2 = 24.58, p < 0.01$)

5) の「助産士が認められないのは不合理だ」に「そう思う」看護師 78人 (50.0%)、助産婦 40人 (25.3%) で、看護師は助産婦に比べて「そう思う」が有意に多かった。($\chi^2 = 22.15, p < 0.01$)

6) の「専門的な関わりに性的なトラブルはない」について、「そう思う」のは看護師90人 (57.7%)、助産婦58人(36.7%)で、看護師には「そう思う」が有意に多かった。($\chi^2 = 18.10, p < 0.01$)

7) の「助産士の参加が助産の発展につながる」に、「そう思う」看護師 105人 (67.3%)、助産婦 73人 (46.2%) で、看護師は助産婦に比べて「そう思う」が有意に多かった。($\chi^2 = 14.48, p < 0.01$)

8) の「助産職が女性だけでも差別とはいえない」に、「そう思う」看護師66人(42.3%)、助産婦 99人(62.7%)で、看護師は助産婦に比べて「そう思う」が有意に少なかった。($\chi^2 = 13.94, p < 0.01$)

9) の「親身な援助は妊婦の安心につながる」に、「そう思う」看護師は 107人 (68.6%)、助産婦は 78人 (49.4%) で、看護師は助産婦に比べて「そう思う」ものが有意に多かった。($\chi^2 = 12.47, p < 0.01$)

10) の「子育てする両親には助産士援助も必要」に、「そう思う」のは看護師 122人 (78.2%)、助産婦 100人 (63.3%) で、看護師には「そう思う」が有意に多かった。($\chi^2 = 10.75, P < 0.01$)

7) 9) 10) の項目では、看護師と助産婦の約半数以上が助産士に肯定的な回答をしていた。全体として看護師は助産婦に比べて一貫して助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対するものが有意に多かった。つまり看護師は助産士導入に賛成のものが有意に多かった。

2. 看護師の援助等と助産士賛否との関連

1) 女性患者への身体援助

看護師を、女性患者への日常的な身体接触援助を行っている群 (以下「援助群」と略す) 97人 (62.2%) とそうでない群 (以下「非援助群」と略す) 59人 (37.8%) の 2 群に分け、助産士賛否との関連を分析したところ、7 項目で 2 群間に有意な差がみられた。たとえば「助産士導

の法改正に賛成する」について「そう思う」のは援助群では70人(72.2%)、非援助群では30人(50.8%)で、援助群に「そう思う」割合が有意に多かった。
($\chi^2 = 11.39, p < 0.01$) <図3の1)>

有意な差があったすべての項目で、援助群が非援助群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

2) 助産への興味

看護士を、助産の仕事に興味がある群(以下「興味群」と略す)44人(28.2%)と興味がない群(以下「非興味群」と略す)112人(72.8%)とに分け分析したところ、3項目で2群間有意な差があった。たとえば「助産士導入の法改正に賛成する」について「そう思う」のは興味群では36人(81.8%)、非興味群では64人(57.1%)で、興味群に「そう思わない」割合が有意に多かった。
($\chi^2 = 8.37, p < 0.01$) <図3の2)>

有意な差があったすべての項目で、興味群が非興味群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

3) 助産への希望

看護士を、条件が許せば助産士の資格を取りたいと思う群(以下「希望群」と略す)48人(30.8%)と資格を希望しない群(以下「非希望群」と略す)108人(69.2%)とに分け分析したところ、8項目で2群間に有意の差がみられた。たとえば「助産士導入の法改正に賛成する」について、「そう思う」のは希望群43人(89.6%)、非希望群57人(52.8%)で、希望群は非希望群に比べて「そう思う」割合が有意に多かった。
($\chi^2 = 20.92, p < 0.01$) <図3の3)>

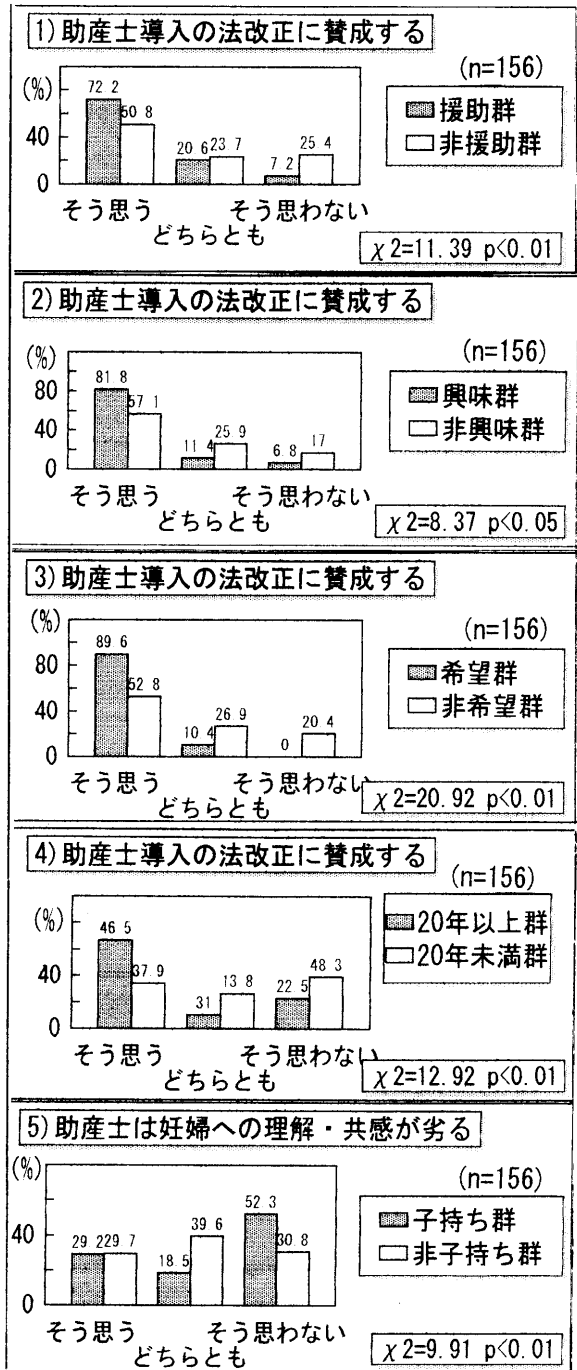


図3 看護士の援助等と助産士賛否の関連

有意な差があったすべての項目で、希望群が非希望群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

4) 免許取得年数

看護師を、免許取得年数が10年以上の群(以下「10年以上群」と略す)39人(25%)と10年未満の群(以下「10年未満群」と略す)117人(75%)とに分け分析したところ、5項目で2群間に有意の差がみられた。たとえば「性器ケアの多い助産は男性に適さない」について、「そう思わない」のは10年以上群26人(66.7%)、10年未満群40人(34.2%)で、10年以上群は10年未満群に比べて「そう思わない」割合が有意に多かった。 $(\chi^2 = 12.92, p < 0.01)$ <図3の4)>

有意な差があったすべての項目で、10年以上群が10年未満群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

5) 子どもの有無

看護師を、子どもがいる群(以下「子持ち群」と略す)65人(41.7%)と、子どもがいない群(以下「非子持ち群」と略す)91人(58.3%)とに分け分析したところ、3項目で2群間に有意な差がみられた。たとえば「助産士は妊婦への理解・共感が劣る」について「そう思わない」のは子持ち群34人(52.3%)、非子持ち群28人(30.8%)で、子持ち群は非子持ち群に比べて「そう思わない」割合が有意に多かった。 $(\chi^2 = 9.91, p < 0.01)$ <図3の5)>

有意な差があったすべての項目で、子持ち群が非子持ち群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

つまり、女性患者への身体援助を日常的に行っていること、助産への興味や助産士への希望、免許取得年数の多いこと、子どもがいることが、助産士導入賛成に関連していることが明らかになった。以上の結果のうち例示した項目のみ、図3に示す。

3. 助産婦の援助と助産士賛否との関連

1) 「夫立ち会い出産」の推奨

助産婦を、出産時の「夫立ち会い」を推奨群(以下「推奨群」と略す)129人(81.6%)と勧めない群(以下「非推奨群」と略す)29人(18.4%)とに分け分析したところ、6項目で2群間に有意の差がみられた。たとえば「適性があれば反対する理由はない」について「そう思う」のは推奨群では60人(46.5%)、非推奨群では11人(37.9%)で、推奨群は非推奨群に比べて「そう思う」割合が有意に多かった。 $(\chi^2 = 8.70, p < 0.05)$ <図4>

有意な差があったすべての項目で、推奨群が非推奨群に比べて助産士導入に肯定的な意見に賛成し、否定的な意見に反対する割合が多かった。

つまり夫立ち会いを推奨しているこ

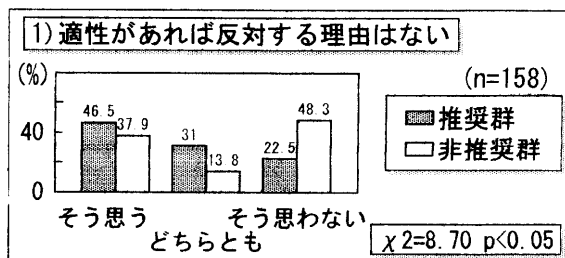


図4 助産婦の援助と助産士賛否との関連

とが、助産士導入賛成に関連していることが明らかになった。

考 察

1. 助産士賛否尺度における看護師・助産婦間の相違

看護師はいわば助産士予備軍であるにもかかわらず、今まで助産士に関する調査の対象になったことはなかった。この調査は助産士導入を検討する上での貴重な資料の1つとなるものと考ええる。

結果から、看護師の約6割が助産士導入に「賛成」であるのに対して、「賛成」と「どちらともいえない」の助産婦はそれぞれ約3割と少なく、約4割が反対の立場に立っていることがわかる。この結果は、現在の日本の助産婦たちの意見の傾向をある程度反映したものと考ええる。

しかし「適性があれば反対する理由はない」、「助産士の参加が助産の発展につながる」、「親身な援助は妊婦の安心につながる」や「子育てする両親には助産士援助も必要」の項目には有意の差があるものの、看護師・助産婦両方の約半数以上の同意が得られ、多くの支持を受けていることがわかる。

核家族化が進み、夫のための妊娠・出産・育児書なるものも多く出版され^{5)・8)}は、「夫婦が共に生み育てる」ことが当然のことになってきた現代においては、夫に対する指導が重要な意味をもつようになっている。このような状況に対して多くの助産婦は、助産士に現行の助産婦と全く同様の業務や役割を果たすことに必ずしも同意しない反面、助産職の役割の拡大や発展のためには、男性である「助産士」の存在の必要性を認めているのではないだろうか。

2. 看護師の援助と助産士賛否との関連

結果から、女性患者への日常的な身体接触援助を通じて信頼関係を得られた経験が、助産士導入賛成意見に反映されていると考える。

ある座談会で看護師らは、白衣を着たら患者が女性だからといって特別な感情が出ることはないことを語っている。またいくつであっても女性の羞恥心には配慮しなければならず、羞恥心のために身体援助を拒否されることも多いが、その配慮を通して信頼関係ができ、やがて看護師を指名するようになる女性患者がいることを述べている⁹⁾。ここから、羞恥心への配慮の重要性と、信頼関係ができれば看護師が身体接触の援助をすることも受け入れられる可能性のあることが、指摘できよう。

さらに母性看護実習で男子学生が褥婦を受け持つ際に、褥婦からの受け入れはよかったが、看護者(助産婦)側から否定的な捉え方をされた例をあげ、看護師や患者が意識する以上に、看護者側が看護師の「性」を意識しているという指摘がある⁹⁾。つまり看護者(助産婦)側が看護師をプロの看護者としてではなく、性的な関心を持つ一男性として捉える傾向が強いことが指摘されているのである。しかし専門職としての教育を同様に受けた看護師を、同じ専門性をもつプロとして看護者(助産婦)側が認められないとしたら、その姿勢は問われる必要があると考える。

弁護士の齊藤は「男性助産婦の是非を問う」と題した座談会で羞恥心と信頼関係の問題に触れ、出産するものとそれを援助するものとの間に最も大事なものは信頼関係であり、信頼関係があってもなお、羞恥心のために助産士が拒否されるかどうかの議論を抜きに、助産士導入の問題は語れないと思うと述べている。また産科医と助産婦との関わり方に違いがあるとの指摘が

あるが、質的にどのような違いがあるかについて疑問の余地があるとも述べている¹⁾。

今後、羞恥心と信頼関係について、また、産科医と助産婦の関わりの相違についてさらに検討する必要があると考える。

3. 看護師の関心等と助産士賛否との関連

結果から、母性実習で得た経験が助産への興味と助産職への希望へと向かい、それらが助産士賛成意見に反映されていると考える。

望月や釜は、母性看護実習で男子学生が妊産婦に受け入れられ、信頼関係を得た体験が自信につながり、助産職への興味を増し、助産士を希望するに至る経過を具体的に語っている^{10) 11)}。

男子学生の母性看護実習を助産婦がもっと受け入れ、男性が助産の領域に関わる意義が助産婦にも見いだせるようになれば、将来この項目に同意する助産婦はもっと増えるものと思われる。

4. 看護師の免許取得年数、子どもの有無と助産士賛否との関連

結果から、看護師としてのキャリアや自分の子育ての経験が助産士賛成意見に反映されていると考える。

医師が専門職としての地位を不動のものとしているのに比べて看護職は、「女性の職業」との認識が高く、社会的評価も低い¹²⁾。そこで働く看護師は看護婦の約3%を占めるにとどまっている¹³⁾。

しかし前述の通り、日常の援助を通して、看護師は女性患者から信頼が得られた経験を積み重ねていると考えられる。また既婚の看護師には共働きが多く、妻と力を合わせて子育てをしているものも多いと見られることから、出産・育児を自分のこととして受けとめ、積み重ねた経験をもつものが多いと考えられる。

これら公私にわたる経験が、妊娠・出産・育児に直接的に関わる助産職への評価と、助産職における男性の必要性をより肯定的に捉えることにつながっていると考えられる。そして助産職の業務と役割の広がりを実感し、看護師としての、また夫や父親としての経験や見識を看護の領域の仕事に就いて生かしたい、と強く願う看護師も少なからずいると考える。

5. 助産婦の「夫立ち会い」の推奨と助産士賛否との関連

結果から、夫立ち会いを推奨する助産婦が、推奨しない助産婦より、医師以外の専門職としての「男性」を、助産の場に受け入れることに肯定的であることが伺える。

「夫」と「助産士」はまったく同じ存在ではないが、助産の場において医師と助産婦（看護婦）以外に登場する「男性」としては、共通性もあると思われる。

夫立ち会いを推奨する理由は様々であるが、従来の「出産は女が一人でするもの」という意識から、「夫婦が共に生み育てる」という意識への変化が強く反映されている^{5)・8)}と思われる。助産婦は出産に立ち会う夫の存在を、男性の「ドーラ」として認めていると考えられ、それが男性の助産職に対する抵抗感を弱めることにつながったと考える。

. 引用文献

- 1) 助産婦教育システム研究会：「助産婦資格の男子への対象拡大」に関する資料，助産婦教育システム研究会，1991.
- 2) 全国助産婦教育協議会：「助産婦資格の男子への対象拡大」に関する調査，全国助産婦教育協議会，1991.
- 3) ピーチくらぶ：助産士問題についてのアンケート調査，ピーチくらぶ，1994.
- 4) 石田貞代：「助産士」議論の背景に関する研究，1994年度聖路加看護大学大学院修士論文，聖路加看護大学，1995.
- 5) 汐見稔幸他：父子手帖，大月書店，1994.
- 6) 池下久弥：男が読む妊娠・出産・育児の本，法研，1994.
- 7) 笠井伸輔：僕の出産日記，リヨン社，1994.
- 8) 鹿嶋敬：男の座標軸，岩波書店，1993.
- 9) 片野裕美他：－座談会－看護の世界の男たち，43(11)，看護学生，1995.
- 10) 望月謙吾：助産士になりたい，助産婦雑誌，47(7)，44-47，1993.
- 11) 釜英介：はたらく現場で－少数派の男たち－（インタビュー記事），朝日新聞，1995. 9. 12.
- 12) 牛島千尋：ジェンダーと社会階級，83-84，恒星社厚生閣，1995.
- 13) 平成6年看護関係統計資料集，日本看護協会出版会，1995.

Abstract:

Different Views between Male Nurses and Midwives
Concerning the Introduction of Male Midwives

Sadayo ISHIDA
(University of Shizuoka)

Yoshiko MOCHIZUKI
(Odawara College of Nursing)

The aims of the study were to clarify different views between male nurses and midwives concerning the introduction of male midwives using approval scale, and to clarify issues concerning their each views.

Answers were returned from 314 people including 156 male nurses who had practiced as a nursing student in the area of maternal nursing and 158 midwives who worked in a hospital. The results were as follows:

1. There were significantly different views between male nurses and midwives in 10 items; male nurses showed significantly stronger agreement than the midwives with approval of the introduction of male midwives in the general.
2. Some of male nurses, who usually take care of women etc. were showed significantly stronger agreement than the others of them with approval of the introduction of male midwives.
3. Some of midwives, who usually encourage 'the so called husband-standing-by-his-wife' when their child's birth' showed significantly stronger agreement than the others of them with approval of the introduction of male midwives.

We need to fully consider about difference between sex.

Key Words: male midwives, approval scale of male midwives, male nurses and midwives.